

## 地域情報（県別）

### 【沖縄】生後3カ月の子を連れ離島へ、30代医師夫婦が仕事と子育てを両立できた理由-有路登志紀・春香・久高診療所医師に聞く◆Vol.2

2022年10月14日（金）配信 m3.com地域版

2021年から久高診療所（南城市）に勤める有路登志紀所長と妻の春香医師。子どものころから沖縄が好きだった春香氏の提案をきっかけに実現した離島診療だが、登志紀氏も学生時代にある医師と出会ったことで地域医療への思いを再確認したという。そして2人は生後3カ月の子を連れて移住。仕事と子育てを両立できたのは島の特性と病院のバックアップがあった。（2022年9月19日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら

——登志紀先生は2011年に群馬大学を卒業後、2013年から外科を専門にしてきたと聞きます。選択の理由は。

**登志紀** 学生時代に出会った医師の存在が大きいです。その先生は群馬県に住んでいた私の祖父を診療してくれた人で、外科医から緩和ケア医に転向したキャリアを持っていました。在宅医療がまだ普及していないなか、患者が自宅で最期を過ごせるよう訪問診療を積極的に行っていました。私の祖父は肺がんを患っており、先生が来てくれたことがご縁の始まりです。

先生の診療に私は衝撃を受けました。がんの話詳しくしてくださったほか、家族に向け、祖父の最期を迎えるに当たっての心構えも説いてくれたのです。「残りの時間はそう長くありません。家族でこの時間をどう過ごすかしっかり話し合い、おじいさんに思いを伝えてあげて。ありがとうと言ってあげて」。私はそんな言葉を聞いてから心持ちが変わりました。

祖父の死をあまり考えたくなかったのでしょうか。祖父は病床に伏していたものの、私は「何となくこの状態が続いていくのではないか」と感じていました。先生の言葉にはっとさせられると同時に、「おじいちゃんとの最期の時間を大切にしたい」と強く意識するようになりました。外科医として手術の経験を積んできた先生から発されることには説得力と含蓄があり、人の生死に向き合ってきた医師の言葉には薬や治療と同じくらい影響力があることを知りました。「こんな先生が地域にいるのか」と驚きました。



有路登志紀氏と春香氏（本人提供）

——それは印象的な出来事ですね。2人それぞれに地域医療への思いがあり、2021年4月に久高診療所に着任します。具体的な話は、沖縄県立中部病院で初期研修を受けた春香先生から上がったのですか。

**春香** はい。私は以前から中部病院時代の上司に離島診療への思いを伝えており、その先生も「離島も人が足りないからぜひ行ってほしい」と賛同してくれていました。離島診療所への勤務は中部病院が設ける総合診療科専門研修ブ

プログラムの一つに組み込まれており、多くは卒後5年目の専攻医が経験します。私は海外ボランティアのために1年間休職したので、規定の流れに1年を加えて卒後6年目、つまり2021年度に島に行きたいと先生に希望を伝えました。夫と話し合い、生後3カ月の子どもを連れて沖縄に移住しました。

**登志紀** 私は先述の先生の影響で、地域医療に貢献できる医師を将来像として描きつつ、外科でしっかり臨床の経験を積もうとキャリアを重ねました。妻から提案を受けたときは、ちょうど次のフェーズを考えているころでした。10年ほど外科の経験を積み、このまま2次救急の外科を続けるのか、それとも以前から興味がある海外での医療活動に携わるかなど考えていました。

離島に行くことには正直、怖い気持ちもありました。土地勘はありませんでしたし、外科のレールを降りることに不安を覚えました。2人とも、診療所で重視される内科診療の経験は豊富ではありません。新しい領域に飛び込んだとして果たしてやっていけるのかとも思いましたが、そもそも私の医療の原風景はプライマリケアにあります。外科の一線で働いてきた経験を生かして地域医療にチャレンジすること、そして、妻の長年の夢が叶うことは魅力的に映りました。

——生後3カ月のお子さんを連れて移住した当初、仕事と子育てはどう両立させたのでしょうか。

**春香** まず、勤務地が久高診療所だったことが良かったと思います。県立病院が運営する16離島診療所で本島から離れているところだと子どもの有事に不都合が起こりやすいでしょうし、人口の多い島はとても忙しいと聞くので子育てとの両立が難しくなるかもしれません。一方の久高島は本島から高速船で約15分と近く、人口も約200人と多くありません。私たちの状況を踏まえ、中部病院時代の上司が配慮してくれたのです。

そんなふうに働く場所の利点があったうえで、着任からの半年間は夫婦で仕事を分け合いました。仕事をしていない方が子どもを見て、私が診療する日も授乳する際は夫が自宅から子どもを連れて来て、授乳中に患者さんがいるときは夫が診療してくれました。半年を過ぎてからは保育園に入れるようになったので、今も平日は子どもを園に預け、診療所では夫が診療し、私は大学院のオンライン講義を受けるなどしています。



診療所に着任して間もないころの有路夫妻とスタッフ（本人提供）

——久高診療所への着任は中部病院の医師の配慮があったのですね。患者紹介時など、日常診療でも病院のバックアップが必要になってくると思います。

**登志紀** 診療時では、親病院の南部医療センター・子ども医療センターが手厚くバックアップしてくれています。先生方から「何かあったらいつでも言ってくださいね」と言っているため、医療的なことを相談したり患者さんを紹介したりしやすい雰囲気があります。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の対応に当たっても事務的な部分を含めて丁寧にフォローしてくださいました。今は私が診療所の所長として責任を持って運営しようと思っていますが、同時に「南部医療センターのチームの一員だ」という意識を持つことができ、「何かあったときは助けてくれる人がいる」と思えることはありがたいです。

このほか、日常診療では「振り返りグループ」でも情報を共有しています。このグループは離島診療所に勤めている医師、つまり中部病院の研修プログラムを受けている専攻医と同院の指導医が参加しているもの。私たちは外部か

らの参加なので、同じ背景の医師と元中部病院のベテラン医師でグループを作り、現在はパソコン越しのオンラインで気になった症例などについて話し合い、適時アドバイスしていただいています。

◆有路 登志紀（ありじ・としのり）氏

2011年群馬大学医学部卒。2013年に同大病態総合外科学講座に入局し、さいたま赤十字病院や原町赤十字病院などに勤務。2017年に森山記念病院消化器外科に移り、2021年からは沖縄県の離島・久高島の久高診療所に勤める。

◆有路 春香（ありじ・はるか）氏

2016年順天堂大学医学部卒。沖縄県立中部病院で初期研修を受けた後、ヨルダンなどで海外ボランティアに従事。東京都のクリニック勤務を経て2021年から久高診療所に勤める。現在は同大大学院グローバルヘルスリサーチに在籍し、国際保健について学ぶ。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

